

## 大隅基礎科学創成財団「創発セミナー」ご案内

拝啓 貴社ますますご盛栄のこととお喜び申し上げます。

さて、私はノーベル生理学・医学賞とブレイクスルー賞などの賞金から一億円を拠出し、昨年8月に一般財団法人大隅基礎科学創成財団を設立いたしました。現在、大学を中心とした日本の基礎科学の将来が大変危ぶまれる状況にあります（私の現状認識と問題意識は添付の財団設立趣意書に述べております）。本財団はこのような状況に、従来のような財団とは異なる活動を通じて、新しい変革の息吹を吹き込みたいと考えています。そのため、本財団の活動は、現在研究費などで厳しい環境にある大学等の基礎科学研究者の支援と、これら大学等研究者と企業との新しい連携のシステム作りを2つの柱といたしました。先ず第二の柱の中心として、現在必ずしも有効に働いていない基礎科学研究者と企業との新たな関係の構築を目指し、両者の触発の場として「創発セミナー」を開始することにいたしました。

企業の研究開発テーマは、難易度が上がった上に世界中で新規参入が増えたため競争が激化し、製品化までのスピードが要求される中で、多くの企業で異分野からの気づき、新しい着想の重要性が益々高まっています。一方で基礎科学には、研究費の不足から存分に研究が進め難い状況にあっても、研究者たちの努力の結果、企業の研究開発のシードとなっているものが多く眠っていると思われまふ。しかし、これまで相互の情報交換、交流が十分になされてきたとは言えまふせん。

本セミナーでは、フロンティアを拓く基礎科学の先端的な研究者と、企業の第一線の研究開発者が一堂に会し、基礎科学の論理的な展開や課題解決のための道筋について議論する中で、参加者同士が気づきを得ることを目指します。

本財団の最大の特徴であり、強みは基礎生物学領域で国際的な研究を展開している研究者たちが日本の基礎科学の発展を願って多数結集していることにありますので、単なる一方向の講演会ではなく、演者以外の財団の活動に賛同する基礎研究者を交えて自由に意見を交わす場として、本セミナーが発展することを期待しています。皆様方のご参加を心よりお願い申し上げます。

本企画には、私もでき得る限り参加し、議論に加わりたいと思います。ご参加のご検討をいただけましたら幸甚に存じます。どうかよろしくお願い申し上げます。

敬具

2018年1月吉日

一般財団法人 大隅基礎科学創成財団

理事長 大隅 良典

大隅 良典

## 1. 目的

大学・研究機関等の研究者と企業人・企業研究者との交流を推進する。

企業の研究開発推進のために、基礎科学の研究者がいかに研究課題を設定して、いかなる方法で解析を進めているか、そしてその中でどのような問題点を抱えているかについて語る。

基礎科学者が企業の研究開発の現場の課題と問題点、基礎科学の応用展開について学ぶ。

## 2. 参加者

企業の研究開発、イノベーションの責任者、管理職の皆様

\*座席に限りがございます。お早めにお申し込みください。

## 3. 第1回セミナー

### 1) 日時、場所

3月16日(金) 16時~20時(セミナー及び交流会) 学士会館

〒101-8459 東京都千代田区神田錦町3-28 TEL. 03-3292-5936 (代表)

都営三田線/都営新宿線/東京メトロ半蔵門線

「神保町」駅下車 A9 出口から徒歩1分

東京メトロ東西線

「竹橋」駅下車 3a 出口から徒歩5分

JR 中央線/総武線

「御茶ノ水」駅下車 御茶ノ水橋口から徒歩15分

「東京」駅 丸の内北口からタクシーで10分

### 2) 演者、テーマ

大隅良典 東京工業大学 榮譽教授 「Lessons from Yeast」

富永基樹 早稲田大学教育・総合科学学術院 准教授 「動かない植物の原形質流動の謎」

### 3) お申込み

次々頁の申込書に必要事項をご記入の上、FAXにてお申し込みください。

### 4) 参加費

お一人1回3万円

(セミナー後に食事をしながら自由に意見交換のできる交流会を用意しています)

### 5) 申込み締切り日

お申込みの締切り日は、2月15日(木)とさせていただきます。

#### 4. 今後のセミナー予定

##### 1) 日程 (確定分)

第2回・・・4月27日(金)

第3回・・・5月25日(金)

以降は、確定次第案内いたします。

##### 2) 今後のテーマ予定

共生が生き物を変える

命をつなげる生殖細胞を「知る」・「使う」

生物のエネルギー変換 (高温微生物の発酵、人工光合成)

細胞構造はどうできているか? (生体膜の最前線)

生命の起源・宇宙

生き物の性「性は移ろいやすいもの」

極限状態下の生物の「したたかさ」

体内時計 (睡眠の研究)

サバはマグロを生むことができるか?

**FAX: 03-5684-1060**

<b>大隅基礎科学創成財団「創発セミナー」</b>	
<b>第1回（3月16日）申し込み</b>	
貴社名	
ご参加者名	
部門名	
役職名	
ご住所	
TEL	
E-mail	
事務ご担当名 (参加者と異なる場合)	
部門名	
役職名	
ご住所	
TEL	
E-mail	

- ・複数の方が参加される場合は、本書コピーの上で、複数枚でお申し込み下さい。
- ・お申し込み受領後、ご案内と請求書をお送りいたします。
- ・お問い合わせ先：一般財団法人 大隅基礎科学創成財団 田中・大竹・福田

TEL : 03-5840-9018    E-mail : event@ofsf.or.jp

## 大隅基礎科学創成財団 設立趣意

### 科学支援のあり方

科学とは知的好奇心に基づく人間の活動の一つであり、本来人々の精神活動を豊かにする文化の一つとして位置づけられるものです。日本では科学と技術が科学技術という一語で語られますが、西欧ではお互いに独立した存在として考えられています。勿論、科学が進歩し、技術へと応用され、逆に技術の進歩が科学の進歩を促進するという関係が益々加速されて来ています。技術の進歩は我々の生活を大きく変化させる時代を迎えており、人間社会の将来を見据えた科学的な思考が益々重要になっています。

日本では歴史的に国立大学・国立研究機関が科学の振興に大きな役割を担ってきたこともあり、私も含め多くの大学人は、科学は国が支えるものであることに疑いを持たずに来たように思います。しかし科学の振興が国家の重要な政策になったのは歴史上古く最近のことです。諸外国、特にアメリカでは、大学の運営費に公的資金が占める割合は日本に比べると遥かに低く、民間からの寄付や企業、財団の資金が大きな役割を担っています。また、米国では財団のサポート以外に、個人の寄付も非常に大きな貢献をしています。米国では税制上の違いもありますが、基礎科学を支える文化が根付いている点が、日本と大きな差として現れています。

### 日本の大学の窮状

日本の大学はこの10年ほど恒常的な運営資金である運営費交付金が毎年削減された結果、大学は大変貧しい状態に陥っています。安定的な講座費が廃止され、全ての研究費や運営資金までがプロジェクト的な競争的な資金となり、大学運営を長期的な計画として進めることが困難になっています。一方競争的資金は競争が激しく、短期間で成果が求められてきた結果、挑戦的な研究や、長期間を要する基礎研究は大変厳しい状況が生まれました。その結果、大学の研究力が低下し、若い世代に深刻な影響を与えています。

第一に、教授、准教授は忙しく会議や大学運営、研究費獲得のための書類書きに追いまくられ、現実に研究時間は確実に減少しています。多くの大学で若手研究者の新規採用が困難な状況となり、正規の職員が減少し、多くの若手のポジションには任期が付きました。この事実は最近Natureにも取り上げられました。5年の任期で、3年目に評価され、4年を過ぎると次の職を探さねばならないことになり、腰を据えた研究は非常に難しくなりました。一流誌に論文を書くことが研究者として確立するために重要な条件となり、研究者は流行の課題に取り組む傾向が助長され、挑戦的で長期的な基礎研究は避けざるを得ない状況となっています。生物学分野では、1つの准教授、助教の公募に200人ほどの応募があることが常態化しています。このような事態は学生、大学院生に大きな影響を与え、大学と研究者への魅力が減退してきています。その結果、大学院博士課程進学者が減少し、定員に満たないという状況が生まれています。ますます大学の研究力と、若者の研究マインドの低下を招き、次世代の育成、科学の継承を考えると極めて深刻な事態に立ち至っています。

---

## 独創的研究の危機

---

日本では近年効率がより強く求められるようになり、科学研究にも短期間での見返りを求める雰囲気が強くなっています。その研究は何に役立つのかがすぐに問われます。これは基礎研究者にとって痛手となっています。自然科学上のブレークスルーはすぐに役に立つ研究をという発想からは生まれません。むしろパラダイムシフトを引き起こす発見は、思いもよらない、一見何の役に立つのか分からない研究から発することの方が歴史的にも遙かに多いことが明らかです。

研究費の効率的運用が叫ばれ、バラマキを廃止して少数の研究者への集中化が進んできました。その結果、多くの優れた、独創性を秘めた研究者が研究費を取れず研究を進められず、急速に研究の裾野が小さくなっています。尖った高いピークは大きな裾野なしには生まれません。今地方大学の研究環境の劣化は急速に進行しています。

大学と企業との関係 一方、日本の企業と大学との関係は、私の周辺領域では、以前よりも希薄になっているように感じています。グローバル化が叫ばれる中、企業の資金の多くが海外に向けられています。大学では上に述べたような深刻な財政難から企業との連携が叫ばれています。しかし大学における研究の意義が十分吟味されることなく、企業における研究との差別化も図られず、結果的に大学の研究の弱体化を招いています。その結果日本の大学に対する企業の期待が益々小さくなり、共同研究の空洞化が進行しています。いまこそ、大学と企業との連携の新しいシステムが必要となっており、それが双方の研究力強化に必ずや貢献すると考えます。

---

## 窮状打破のための第一歩

---

勿論国の研究教育予算の抜本的な増額が望まれますが、いまの窮状を打ち破るためには、一刻も早い変革の第一歩を踏み出すことが必要です。私は、国や公的機関、財団などの資金では、支援が難しい課題に対して、現場の研究者の目線に立った多様な試みを進めたいと考えています。それは、単なる少数の研究者の支援に留まらず、研究の原点を問い直すきっかけとなると考えています。基礎生命科学が目指す生命の根本原理の解明は、人類の共通の財産として広く共有されるべきものですし、真理に対する感動、飽くなき知的好奇心こそが未来の社会を支える原動力だという認識が広がることが重要です。したがって、本財団の活動が大きく育てば、現在の萎縮した大学の雰囲気が改善の方向に向かう大きな流れの第一歩になると考えています。日本でより優れた独創的な研究が創出され、若者が研究の楽しさを実感することで、持続的な人材が育つと考えます。それが引いては企業の研究力を高め、知財をも生み出すことになると信じます。また短期間の製品開発をめざす共同研究から脱して、真に有効な大学と企業のより有機的なつながりを強める活動を進めたいと思います。

私は、この間多くの大学人、企業家と議論を重ね、基礎科学を支援する財団の立ち上げを決断致しました。そのためには、多くの現場の研究者の結集と、財団を支える個人、篤志家、企業による支援が不可欠です。また高い見識を持ち公正な判断のできる研究者の結集が必須の条件となります。

本財団は、これまでにない新しい社会実験ですが、日本の現状に危機感を抱き、基礎科学の発展に期待と使命感を抱かれる皆さまのご支援を頂けることを心からお願い致します。